

懐風藻における問題点

小島憲之

奈良朝天平勝宝三年冬十一月（孝謙天皇七五年）に成立した、わが国最初の総集、『懐風藻』については、今日なほ問題点が少ない。もしかりに将来懐風藻について論ずる場合があるとするならば、私は私なりにかなり多くの問題をかかへてゐる。以下、その問題点のいくつかを挙げて、メモ的に多少の私見を述べてみたい。

(一) まず同じ奈良朝人の文学において、詩と歌との表現内容の差或はその比較対比について考へる必要がある。七夕をめぐる詩と歌とについて眺めると、懐風藻の七夕詩数首は六朝詩の語句の模倣が濃厚である。たとへば（詩の番号は古典、大系本の番号）、
 鳳駕雲路に飛び、竜車漢流を越ゆ（藤原総前、七夕58）にみる、鳳駕や竜車は六朝詩の如く織女星の車をさす。さらびやかに着飾ってしづしづと天の河を渡る者は女星であり、ひたすら待ちわびるのは彦星の方である。しかし同じ上代ながら万葉集といふ歌の場合はその反対である。

天の河川門に立ちてわが恋ひし君来ますなり紐解き待たむ

(二〇四八)

年によそふわが舟漕がむ天の河風は吹くとも波立つなゆめ

(二〇五八)

の如く、待つ方は女星（前の歌の場合）、川を渡り或は舟を漕いで女星のもとに急ぐのは彦星（後者の場合）である。上代人の生活をそのまま反映させたのはむしろ歌の方であり、これは現実的な男女の生活を星空の世界にあてはめたものである。同じ上代人の文学でありながら表現内容に差をみるのは、詩といふ文学形態が元来「よそもの」であるためである。従つて、上代詩そのものだけでは上代人の心情はわからない。懐風藻の中に老荘的竹林虚無的な内容をもつものもあるが、それを上代人の思想に「直ちに」結びつけようとする考へ方は、あまりにも詩といふ文学を無視した方法といへるであらう。この際一步退いて眺める必要がある。

懐風藻に梅の香について詠んだ詩が数首ある。

松風の韻詠に添へ、梅花の薫身に拵ふ（田辺百枝、巻一）
 柳条未だ緑を吐かね、梅蕊已に裾に芳し（前集388、巻一）

などはその一例。梅の詩句十数首に照らして、その香を詠んだ数首は数としては必ずしも少くない。これは六朝特に梁以来梅の香を詠んだ詩が多く、そのために懐風藻の詩も自らその方向に傾いたのが原因の一つである。これに対して、歌の方では、天平末期の、

梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ

(市原王、四五〇〇)

が確実に梅の香を詠んだ唯一の例で、あとは「にはふ」の中に香を含むか否か、解釈上の問題をもつ歌のみに過ぎない。このやうに梅の香についても表現内容に差があるのは、やはり懐風藻の詩の総元締に中国詩がひかへてゐるからである。歌に「香」が殆んどないために、上代人の花の香に対する生理的鈍感性を力説した説さへも現はれはしたが、これは詩を含む上代文学全体を考へてみなかったためである。歌(万葉集)を考へる場合には詩(懐風藻)を、詩を考へる場合には、大いに中国詩をも考慮に容れる必要がある。

更に一例をあげよう。懐風藻の詩に、

雲は巻く三舟の谷、霞は開く八石の州(吉田耳、從三)

がある。このうち「雲は巻く」は、雲が巻いて収まる意。注釈書の中にははつきりしないものもあるが、この表現はやはり中国詩に本づく。

天淨宿雲卷(隋煬帝、拾舟登陸示慧日道場)

晴雲稍卷寒巖樹(初唐張九齡、奉天和盟製)

はその一例。これに対して、万葉集の歌の方では、このやうな表現は見当らない。雲は一般にたつ・かかる・たなびくなどに続くが、詩の「雲は巻く」の表現に当るものは、

滝の上の三船の山に居る雲の常にあらむとわがもははなくに

(司刑皇子、二四二)

の如く「居る」であらう。「巻く」といふ語は上代語に多い。しかし「雲は巻く」の表現が歌になくて詩にのみ残るのは、その本づくところの差に原因があるものといへるであらう。このやうに懐風藻

は万葉集との比較に於て考察すれば、新しい上代人の表現をつきとめるのに役立つであらう。

(二) 懐風藻の詩は近江朝から天平勝宝まで約八十年間の詩を収める。従つて詩風の「うつり」もあらう。そこに懐風藻自体に於てその内部に文学史的に文学の流れを掴むことも問題の一つとなる。懐風藻の文学時代を前期と後期とにわけ、文武・元明朝頃(和銅頃)までを前期とし、長屋王をめぐる時代より編纂までを後期とするのは私の持論である(岩波古典大系69、解説参照)。懐風藻を全体としてみれば、六朝詩の語句を利用した点の多いことは先人の説の通りであるが、前期の文武朝頃にはかすかに初唐詩の影のみられることは注意すべきである。後期は王勃などの初唐の詩序の影響のかなりみられることは、今日の常識となつてゐるが、これを溯る前期にその姿がみられることは特に意を払ふべきであらう。これは恐らく文武朝慶雲元年(七〇四)第七次の遣唐使の帰朝が初唐詩集の若干をもたらしたためであらう。王子安集(王勃の詩)を始めとして、唐太宗文皇帝集・翰林学士集(真福寺藏)などはこの時の伝来であつたかと思はれる。文武朝をめぐる万葉集の歌にかなり中国風のものが見られるのも、そこに原因がある。この懐風藻時代と万葉集時代(一般に四期にわけると)がどのやうに結びつくか、文学史の上で興味ある問題を提出するであらう。

(三) 懐風藻の評価はどのやうにすべきか。この詩を激賞する見方も近世以来あるが、果してそれでよいか、問題である。その評価の方法については、中国詩の類似句をみつつけるのもその一つであらう。たとへば、

葉落ちて山逾静けく、風涼しくして琴まよひ益ますます微よそよそけし(中臣大島、山齋13)

の如き佳句も、梁王籍の詩に「蟬噪林逾静、鳥鳴山更幽」があることからみれば、「清麗絶倫」と賞称した説も（伍愨「日本之漢詩」、割引きして評価しなければなるまい。また懷風藻には「和臭」がかなりある。このやうな点が加味されて正しいその評価が定つてくる。今後の研究に期待がまたれる。

その他、懷風藻自体の内部の問題、たとへば、詩教の問題―後人附加の詩あり―、撰者の問題などかなり追求すべき問題がある。

日本書紀における問題点

西宮一民

また平安初頭勅撰詩集の表現とどのやうに違ふか―後者に唐代俗語表現が甚だ多く、懷風藻にないのも一つの新しい見方である。与へられた紙幅はその考証の余裕を残さない―、この問題も殆んど未開拓の部分といへるであらう。懷風藻に於ける問題点はそのまま他の關聯する文学作品の問題点にもつらなる。（六月二十日）

―大阪市立大学教授―

日本書紀研究の歴史はまことに長いが、それら先賢の業績に導かれながらも、今日では、もはや、個人の能力の限界を越えて、偉大なる幾つかの頭脳の総合的研究を必要とする段階にきてゐるのではないかといふ気がする。またそれほどの奥行きと広がりをもつてゐるのが日本書紀であるといつても過言ではない。その意味で、今なほ問題は山積してゐると、いへばいへるものの、具体的には少なくとも、高次本文批判と古訓研究が、今後の研究の方向となるのではないか。

高次本文批判においては、例へば坂本太郎博士の諸論考―「天智紀の史料批判」―「日本学士院紀要」13の3など―、小島憲之博士の「出典論―『上代日本文学と中国文学』上―の方法が最も望まれ、またその諸業績を

出発点として、一方では史実への肉迫、一方では述作表現論（文体論といつてもよい）への道が開けてくるであらう。また古訓研究にあつても、例へば神田喜一郎博士―「日本書紀古訓考証」、小島憲之博士、築島裕博士―「平安時代漢文訓詁語につきての研究」―など、漢字と訓の結びつきや語義などの解明に指針が与へられたといふべきで、なほ未詳の訓もままある今日、将来に俟つべきものがあらう。いま、かりに日本書紀冒頭の本文を見よう。

A. 古、天地未レ剖、陰陽不レ分、……故天先成而地後定。

B. 然後神聖生ニ其中ニ焉。

C. 故曰、開闢之初、洲壤浮漂、譬猶ニ游魚之浮ニ水上ニ也。

D. 于レ時天地之中生ニ一物、状如ニ葦牙ニ便化ニ為神、号ニ国常立尊ニ